

GA JAPAN

Global Architecture

ENVIRONMENTAL DESIGN 1-2/2005

安藤忠雄 / ホンブロイッヒ / ランゲン美術館 横文彦 / 国立国語研究所 高松伸 + 川口衛 / 天津博物館
日建設計 / 鹿ノ門琴平タワー 有馬裕之 / mci-a+mj 伊東豊雄 / TOD'S表参道ビル 隈研吾 / LVMH大阪 他

72

[建築2004/2005] 総括と展望 座談会=石山修武・塚本由晴・二川幸夫
建築的な新しい風景を如何に評価するか / TOD'S表参道ビルを中心に 座談会=隈研吾・妹島和世・西沢立衛・二川由夫



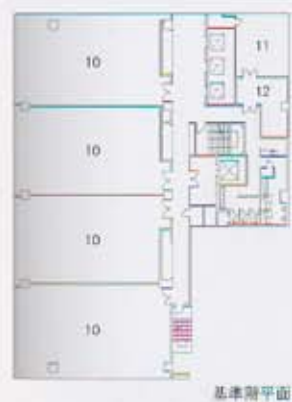
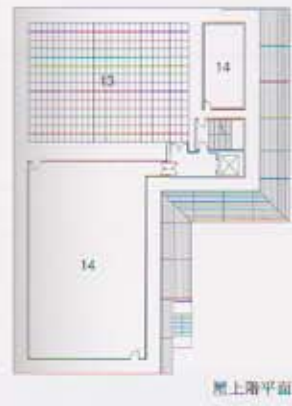
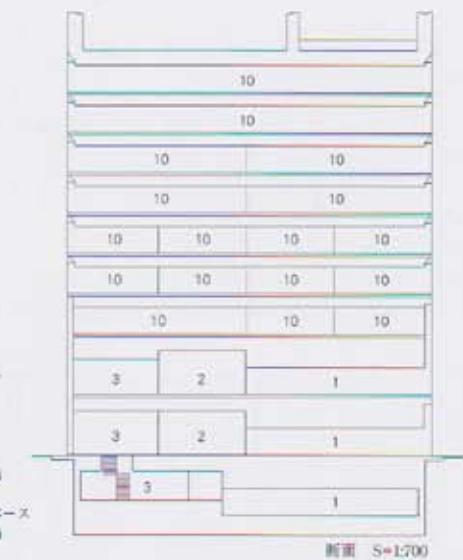
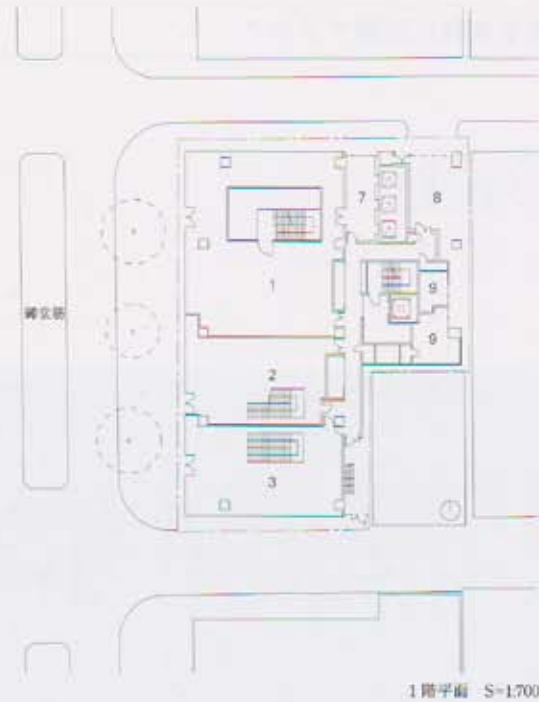
LVMH大阪

隈研吾 建築都市設計事務所

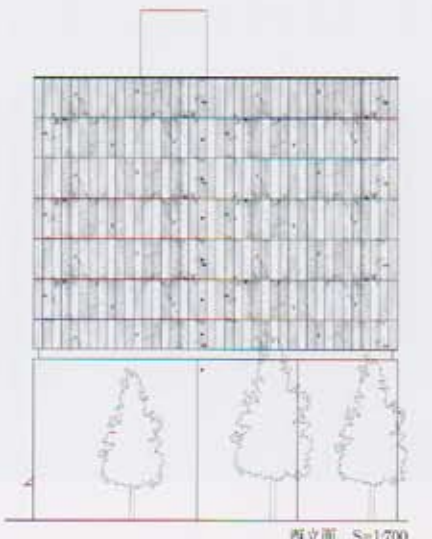
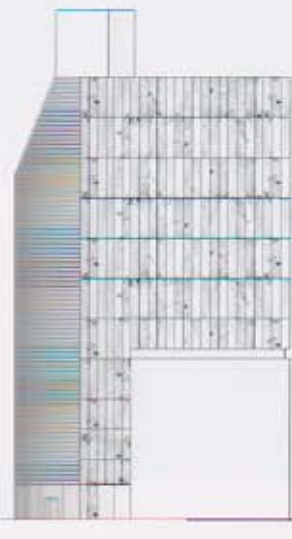
大阪府大阪市中央区心斎橋筋一丁目十七

施工：鹿島建設株式会社 TEL: 06-6336-3311

撮影：坂下智広



- 1 店舗A
- 2 店舗B
- 3 店舗C
- 4 駐輪場
- 5 ポンプ室
- 6 防災センター
- 7 EVホール
- 8 駐車場
- 9 ゴミ置場
- 10 オフィス
- 11 室外機置き場
- 12 機械室
- 13 イベントスペース
- 14 屋外機器置場



CHAUI



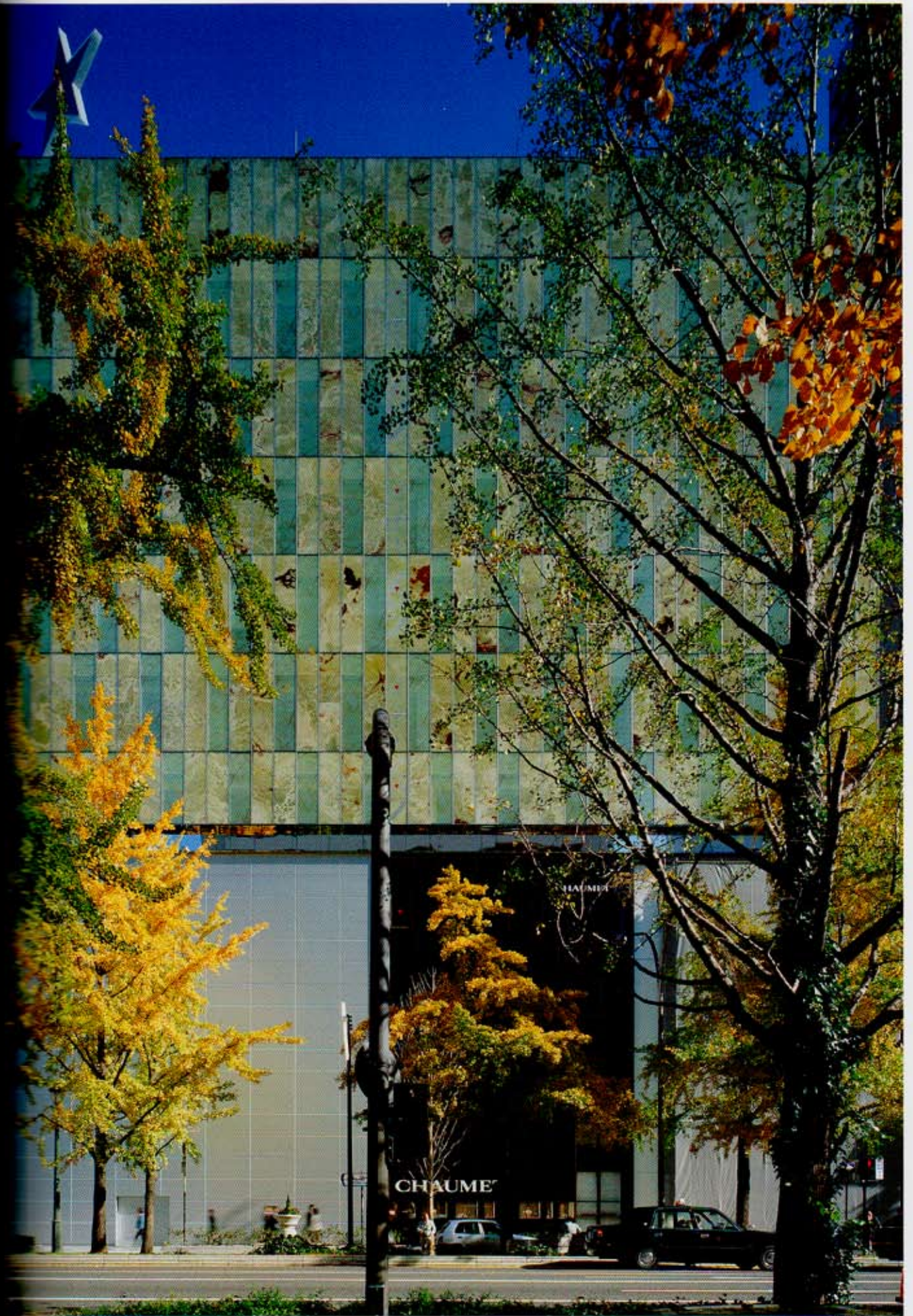
1階エントランスホール。壁と床はオニキス張り、天井はオニキス柄プリントのフィルム仕上げ



北側従業員用エントランス



5階エレベーターホール。正面から北側外壁のオニキスを透して外光が入る



西側に接道する御堂筋越しに見る全景



オフィスのカーテンウォール。フィルム部分は外界が透けて見える



サッシのディテール

縦立に仕込まれた照明で夜間は内部からオニキスが照らし出される

基準階オフィス。オニキスとプリント・フィルムによるカーテン・ウォールが、空間にグラデーションを作り出す

名称：LVMH大阪
所在地：大阪府大阪市中央区心斎橋筋1-9-17
建築主：LVMH
モエヘネシー・ルイヴィトン・ジャパン
用途：店舗、事務所
設計・監理：engineers network
建築：隈研吾建築都市設計事務所 担当/隈研吾、横尾実、須具重義
構造：構造設計室 担当/橋本、樋口聡
設備：森村設計 担当/鈴木幸正、関口正浩、吉田誠、松尾広、瀬在祐
PM：三井不動産
外装コンサル：Front+engineers network
Front担当/Marc Simmons

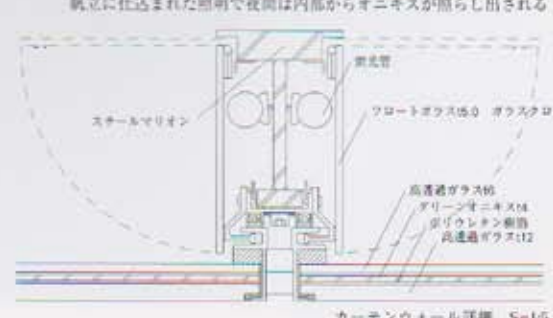
engineers network担当/仁藤善徳、藤川由美
監理：隈研吾建築都市設計事務所 担当/隈研吾、横尾実、須具重義
施工：建築及び統括：産島建設株式会社 担当/茅野毅、澤本明、堀崎寛吉、小川深志、谷口隆宏、白石真也、村上順
設備・空調：新日本空調 担当/坂田大作
電気：関電工 担当/川口誠生
外装CW：DEVICE・三協アルミニウム工業JV
規模
敷地面積：983.08㎡
建築面積：851.17㎡
延床面積：8,297.36㎡

建蔽率：86.38% (許容100%)
容積率：837.42% (許容1,000%)
各床面積：B1F/759.26㎡、1F/824.09㎡、2F/825.12㎡、3F/839.83㎡、基準階/839.97㎡
階数：地下1階、地上9階
高さ：B1F-2F/6.0m、3F-9F/4.0m
天井高：B1F-2F/4.4m、3F-9F/2.7m
最高軒高：39.81m
最高高さ：44.12m
駐車台数：27台 (内25台12層地)
期間
設計期間：2002.11.03.07.
施工期間：2003.07.04.11.

敷地条件
地域区分：商業地域
道路幅員：南60m、北78.2m
構造
主体構造：鉄骨造
一部構造：SRC造 (地下)
杭・基礎：場所打コンクリート杭
外装仕上げ
外壁：オニキス石合わせガラス (高透過強化ガラス 厚12+ポリウレタン樹脂 厚20+グリーンオニキス 厚40+ポリウレタン樹脂 厚20+高透過強化ガラス 厚12 照明付きスチールマリオン支持、プリントフィルム貼りガラス

(フロートガラス 厚12+PETフィルム)、
押出成型板フッ素樹脂塗装
屋上イベントスペース：床/ボルカプレート 厚3 (電撃耐電圧仕上り)、壁/オニキス石合わせガラス
備注：中国産黒御影石バーナー仕上げ、ショットプラスチック平板
内装仕上げ
●1Fエントランスホール
天井：合わせガラス (PETフィルム貼り)
壁・床：オニキス石合わせガラス
●B1F-2F共用部
天井：PB 厚125+125、AEP
床：PB (ULI法) 厚93、AEP

●3F共用部
天井：系統天井、岩棉吸音板 厚13
壁：PB 厚125+125、AEP
床：OAフロアの上、タイルカーペット貼り
●3F共用部
天井：PB 厚125+125、AEP
壁：PB 厚95+125、PB (ULI法) 厚95、AEP
床：カバフロアリング 厚15 巾90 白塗装の上ウレタン塗装
●4F共用部
天井：PB 厚125の上岩棉吸音板 厚12
壁：PB 厚95+125、AEP
床：-250Aフロアの上タイルカーペット貼り



カーテンウォール詳細 S=15

ギリギリに追いつめた 材料のリアクション

隈研吾

「LVMH大阪」は、簡単に言えば「ONE表参道」の二階にLVMHグループ傘下の路面店が入り、それ以外のフロアはオフィスがシェアする。つまり、「オフィス・ビルを、一つの商業ビルのなすौरで包むにはどうしたら良いか？」がテーマだったわけだ。

「ONE表参道」では、表参道のケキキ並木に燃発されて、すべての壁面を木ルーバーでコントロールすることを試みました。でも、「LVMH大阪」が接する御堂筋には、独特のケキキ雰囲気を感じたのです。そんな通りに、木ルーバーで覆った建築を出現させても、既存の環境に負けてしまうと

思えた。もう少し、大阪独特の華やかさに負けないようなオーラを発し、しかも、窓とそれ以外の面にヒエラルキーを発生させずにコントロールできるマテリアルは無いものか？ その答えが「光を透す石」オニキスだったわけだ。

石の持つている魅力は、マツシブなモノであると同時に、一種の透明性も孕んでいる両義性です。ローマ時代の遺跡からも、太陽光を透す窓として用いられていた、大理石が出土したそうです。その両面性を理解した人間じゃないと、石を上手く使いこなせない。

例えば、アドルフ・ロースの「アメリカン・バー」(1977)。あの有名な店舗内の壁面は、小さな正方形グリッドに配された一枚一枚の大理石から、独特の光が零れ落ちていたと記憶しています。つまり、透明なマテリアルとして石を用い

たからこそ、その場に独特のオーラが宿ることを、ロースは理解していたわけだ。ただし、外壁でそれが可能になるとは、彼の時代では考えられなかった。

結局、現代建築を通じた材料批評を、はくは「貫してやり続けていくんだ」と思う。材料に対して意識をかけた時に、材料自体が反抗的なリアクションをしてくる。その駆け引きのスリルがないと、材料の魅力は引き出せない。例えば、石をドンドン薄くしていくと、石自体が「もう駄目だ。ガラスに包んでくれ！」と首を上げてくる。その瞬間に、「四、三、二、一」とつぶやいたら包んであげられるけれど、それ以上はしてあげない」と突き放す。フラットパーだけで止めて、けして枠に填めない状態。「そのデザインでなんとか耐えろよ」と、オニキスと対話するわけです。悲鳴を上げそうなオニキスが、ギリギリの洋風・ガラスを纏って、外部に曝されている。その緊張感が、独特の表情を作り出すと思う。

「イニール大学橋本図書館」(2013)にある透光壁の大理石だって、厚さが「2cmもあるぞうです。今、あの美しい透過光を見ても、はくの眼には何となく重たく感じてしまう。つまり、反則ギリギリの武器を使って素材を挑発し、そのリアクションがキチンと返ってくる状態に表現したいと、現代では通用しない。さらに、「LVMH大阪」ではオニキスだけでなく、フィルムやセラミック・プリントなど、擬似材料のパネルとも並列させています。それも、石への挑発行為の一環です。実際、オフィス内で執務している人間にとってみれば、四、というオニキスの薄さでさえ光が入ってくるだけじゃん」と感じられてしまう瞬間もある。外



野を見ることもできず、天気の状態さえ確認できない。その欲求を満たすためには、現状では、オニキスが石であることを明け渡さざるを得ないわけです。

ただし、○○%譲ってしまうわけではなく、せめて「石のパターン」だけは死守させる。当初は、その開示方法を、セラミック・プリント・ガラスで考えていました。石のパターンを、ガラスに四色刷りして、カラー再現しようとしていたのです。色味のサンブル段階では、濃く繊細な印刷ができ上がってききました。でも、透視可能な薄膜の薄さで、実際にガラスへセラミック・プリントを施してみたら、我々が思っていたような色の繊細さ、微妙なグラデーションが再現できなかつた。

それで、フィルムという次の疑似オプシオンに移行しました。フィルムへのプリントは、通常印刷技術の延長なので、思うような繊細さが容易に実現できた。ただし、非常用出入口にフィルム貼りしてしまうと突き破れないので、その部分だけ再度、セラミック・プリントに回帰させたのです。そうやって、はくたちの要求に対して、ギリギリの聞き合いを素材と行った結果、石という母胎が三種類の姿に変化してきました。

自然物の非同一性と、人工物のどうしても拭いきれない同一性。今回のデザイン・プロセスは、まさに、その端境を追求していたんだと思う。ただし、その線引き自体を問題にしているわけではなく、境界線上の緊張感みたいなモノが再現されて初めて、建築に魅力を与えようと考えていた。

「JR渋谷駅」(2007)でも行った同様の試みは、人工物だけで緊張感を誘発しようとしていたのです。でも今回は、自然物の持つているランダムさは、もう

つ、大きなレベルで揺蕩だということに気付かされた。自然石とプリントの差異なんて、自然物同士の乱雑さに負けてしまう。特に遠くから見ると、自然と人工間の差異が完全に消えていると思えたことが、一番の発見だった。「このランダムさが、自然物の力だ」と、逆にフィルムを換んだがために教えられたわけです。

ある意味で「LVMH大阪」は、外の論理で作りに上げた建築です。ただし、オフィス内には人間が、どこまで外の論理を許容できるのか」と、大きな問題でした。同様の問題を抱えたのが、「ONE表参道」で用いた木ルーバー。はくたちの心配を余所に、ガラス面の外から零れてくる独特の木質感は、ストリートに内部に浸透し、オフィス空間をポジティブに変質させていた。それと同じ状態を、「LVMH大阪」のオフィス空間にも期待しています。

「バルセロナ、バウイリオン」(1998)のように、複数の石版のコンポジションによって、ユニバーサル・スペースを具現化する試みは、過去にも行われていたと思えます。恐らく今までは、石と自然物の持つている強さにインテリアが拮抗するための手段として、コンポジションを使っていたと思うのです。でも、「LVMH大阪」の屋上や、オフィス・スペースは、けしてコンポジションではない。コンポジションは、ある意味で、「強く強い角」に代表されるように、人間の意識を支配するノイズが沢山、発生するわけです。その「強力な角」を強力排除して、人間の体が不均一なオニキスと「対」で浸り合える関係を、インテリアに生み出すことだけを考えていたのです。